

グロテスク～ Aゴシックすごい

GE Gravenによる



第20章

【第1巻最終章 :復活】



ラザルスは、メディチ卿の緑がかった光を放つ亡霊の後を追って飛んでいた。

針葉樹に覆われた海岸線を南下し、港町サン・マキシムへと向かった。右手に、入り江や半島が点在する、ぼんやりと不規則な海岸線が見えた。高速で飛んでいるため、海岸線はまるで跳ねる残像のように、何度も何度も前後に揺れ動いているように見えたかもしれない。そして、たとえ移動中でも、左手に広がる大海原と深紅の水平線は、まるで静止した海景のように見えた。それでも、ラザロは夜明けの細い赤い線に、かすかな、ほとんど知覚できない変化を感じ取った。その輝きと熱の高まりは、まるで猛烈な炎の竜が急上昇し、その恐ろしい昼の光で地上を焼き尽くそうとしているかのようだった。

翼の鼓動が響く中、時は流れ、エルジヨの高鳴る心臓の鼓動は、ほんのわずかな時間単位で刻々と過ぎていった。東の雲の果ては、天の裏側に塗りつけられた巨大な血痕のコーラージュを思わせるような、広範囲にわたる赤色に染まりながら、ラザルスは飛び続けた。

彼はメディチに合わせてペースを倍にしたが、幽霊は前進し続けた。

意図的で途切れることのない急ぎ。細い線が海側の水平線から放射状に伸び、薄暗い空を横切って外側へと広がり、まるで巨大で燃え盛る蜘蛛の巣。朝日が巨大な筋となって空へと昇り、やがてこの天上の夜明けの光景はあまりにも壮大で、遠くから見ると、ラザロのシルエットは巨大な火山の輝きを背景にした蛾の影のように見えたかもしれない。

ラザロの不安は恐怖へと変わり、やがてパニックへと発展し、「メディチ家よ、もう時間がない！」と叫んだ。

「もう少しだ、ラザロ！」

「いや、内陸へ進まなければならない！」

「いや！すぐそこだ！」メディチは目の前の、細長い半島を形成する岩の露頭を指さしながら叫んだ。

「もうすぐそこだ！逃げ！」

ラザロは顎を食いしばり、肩を緊張させ、風に身を任せ、飛び出した。新たな速度で。彼は低く身をかがめ、海面すれすれを飛行し、メディチの踵にしっかりと掴まっていた。二人は岩だらけの岬を回り込み、急旋回した。ラザロが崖に住む鳥の群れを散らすと、羽が海上に舞い上がった。鳥たちは驚いた翼を突き破り、岩だらけの地峡を覆い、さらに内陸へと進路を変え、浅く緑がかった海の入江へと入っていった。入り江には、小さな島々がランダムに散らばっており、まるで存在論的に提示された、傷だらけでむき出しの岩の尖塔のような山々のように見えた。それらはすべて、水に焼かれた灰色の墓石のように湾にそびえ立ち、水に覆われた墓の広い緑から立ち上がっていた。

「あそこにいる！」メディチは、まるで空に向かって突き出た犬歯と切歯が並んでいるように見える、二つの島々を指差した。岩だらけの島々の間には、暗い色の海が狭く広がっていた。ラザロが二つの島の間の海に近づくと、はっきりと、そしてどこか場違いな小さな構造物が見えてきた。彼の視界が広がるにつれて、それは次第に細部が浮かび上がってきた。

「どう思う？」メディチはラザルスのそばに倒れ込みながら声に出して尋ねた。「ここは避難場所として適していて、人里離れた場所に停泊しているだろう？」岩陰で、ラザルスは船尾が沈み、船首が突き出た傾いた歯車船の残骸を見つけた。水面における独特な角度から、その船は、もし大波に阻まれなければ、北の空へとまっすぐ向かって航行しようとしていたかのようだった。ラザルスは速度を落とし、傾いた残骸を詳しく調べた。

染み付いた船体板はかつて水平だった喫水線を物語っており、そのすぐ下には毛布が

突き出た船首の最下部からは、白く変色したフジツボが突き出ており、ひっくり返って朽ち果てた船は、まるで骨ばった白い髭を生やしているかのような外観を呈していた。しかし、その船が完全に生命のない船体ではないことを示唆するものは、他にもいくつかあった。ラザロは、藻に覆われた甲板を横切る太い麻縄が、まだ船の様々な部分にしっかりと固定されているのを見つけた。また、部分的にしか固定されていない縄もあり、その結び目のない端は船尾に垂れ下がり、暗い水の中に自由に揺れていた。陰鬱な波のリズミカルなうねりが、ほつれた縄を揺らし、まるで一列に並んで踊る蛇のように見えた。

全体的に見ると、その船はかなりの大きさに見えたかもしれないが、長距離の海洋航海に耐えられるような航海に適した設計ではなく、むしろ地方の沿岸港の間にある穏やかな海岸線の海を克服した。しかしながら、極めて老朽化した船体には帆もマストもなく、後甲板の残骸が主甲板の上に崩れ落ちていた。また、藻に覆われたプラットフォームや壊れた手すりの壁のほとんどには、乾燥した魚の死骸が散乱しており、かつてカモメが食べていた痕跡と思われる。

メディチが船に近づくと、ラザルスは船体の損傷箇所をより詳しく調べるために船の周りを一周し、船に問題がないことを確認すると、メディチと共にメインデッキに上がった。

彼の新たな体重で板がきしんだ。メディチは音もなく重々しく船倉へと歩みを進めた。

「ここだ」と彼は振り返り、船倉の中に姿を消した。

ラザロは彼の後を軽やかに歩き、彼の安定した足音に合わせて甲板の板がきしんだ。「私は「気にしない」と、飛行でまだ息切れしている彼はぶつぶつ言った。「安全なのか？」彼は額の汗を払い、額のしこりを撫でた。

「彼女は一日滞在するには十分安全だ」とメディチは船倉の下から叫び、その声は船倉全体に響き渡った。「それに彼女の腹は夜のように真っ黒だ お前の病にはうってつけだ、」

「集まれ。」甲板にコツコツという音が響き渡り、まるで拳が木を叩くような音がした。その時、メディチのくぐもった声が付け加えた。「船体は、沈没した状態を考えれば、しっかりしている。おそらくこれらの島々が、幾度もの嵐の直撃を免れさせてくれたのだろう。それに、船尾が少し傾いているが、ラザルス？なぜ甲板にいるのだ？」

島の影のベールの中で、ラザルスは船底の薄暗い奥深くへと降りていく前に、むき出しの岩の造形を最後にもう一度見上げた。その間ずっと、

彼は「私は翼のない浮遊するメディチ家の幽霊ではないのだから、時々息を整えなければならない」と不満を漏らした。

スペクターはくすくす笑った。「ずいぶん急いで飛んだな、ラザルス。まさかそんな風に飛ぶとは思わなかったよ。」

ラザロは船底にブーツを重々しく踏みつけ、向きを変えて腕を組んだ。

メディチの方をぼんやりと見つめながら言った。「太陽で死にかけたし、頭で鳥を殺したし、海に墜落しかけた。なのに、今さら笑うべきなのか？」

メディチは鼻を鳴らし、笑いをこらえながら、ラザルスの髪に絡まったカモメの羽を何枚か引き抜いた。「ラザルス、許してくれ。君が鳥にぶつかるのを見たのは初めてだ。怪我はしていないか？」

「鳥よりはました」とラザロは答え、額の赤みがかかったこぶをもう一度確認した。

「ラザロよ、あなたの不幸を軽んじるつもりはない。」メディチはラザロの傍らに立ち、彼の額をじっと見つめた。「おそらく、200年の時を経て、あなたの新たな仲間が私の苦しみに新たな光を当ててくれたのだろう。不思議なことに、今や私は死を恐れるに足る正当な理由があるように思える。そして、それによって私はより生きていることを実感する。もちろん、私の死ではなく、あなたの死だ。結局のところ、もしあなたが滅びるなら、私の愛しいソフィアと共に、私も必ず滅びるだろう。」メディチは咳払いをして両手を合わせ、厳粛な誓いを立てた。「ラザロよ、私は決して故意にあなたを危険にさらすようなことはしないと約束しよう。」

ラザラスは弱々しく微笑んで頷いた。すると幽霊は両手を広げてラザラスの居場所を教えた。「ほら、額にちよっとしたこぶができただけで、太陽から完全に守られて、ここに立っているんだね？」

ラザラスは感覚を研ぎ澄ませた。鼻は湿っぽく潮の香りのする空気を吸い込んだ。藻、魚、腐った木材、そして衣服に染み付いた甘い汗の匂いが混ざり合っていた。幸いにも、漁師の最後の悪臭は衣服から消えていた。薄暗く、海で冷やされた船倉の中で、翼の肉に冷たい汗の粒を感じた。暗闇の中で瞳孔が大きく開き、船の内部構造が形を成した。メディチの言葉が真実であることが分かった。船の空洞は頑丈そうで、肋骨と外殻はしっかりと密閉されていた。スペクターはくすくす笑った。足の不自然な角度を感じ、床を調べたところ、一番奥の板は船倉の船尾全体に広がる淀んだ黒い水たまりの下に消えていた。彼は向きを変え、船倉の狭い船首の床を調べた。そこは高く乾いていた。彼は船倉の入り口から頭上を覗き込み、むき出しの空と星々を眺めた。それからメディチの方を向き、上空を指差した。

「残念ながら、太陽は昇る。そして、その最も輝きを増す時、この闇を焼き尽くし、そして私をも焼き尽くすだろう。」

ラザラスが甲板に出ようとした時、メディチが駆け寄ってきて彼を止めた。「心配するな。私に任せろ。休め。」亡霊はニヤリと笑い、医師特有の難解でリズムカルな哲学的な知恵を彼に囁いた。「あらゆる病は、治療によって最終的に死に至るように、我々も不幸を虐待し、それによって安堵と安心感へとつながる。」

「それはどういう意味ですか？」

「つまり、ほんの数本の木材が散乱するだけで、どんなに明るい昼間でも真っ暗な夜に変えてしまうということだ。」彼はそう言って笑い、甲板へと姿を消した。

頭上では、ラザルスがメディチが慌ただしく姿を消し、再び現れるのを見ていた。メディチは崩れ落ちた船の後甲板の破片を拾い集め、開口部に重ねていった。最後の木片が天空の痕跡を完全に消し去ると、メディチは下に戻り、ラザルスの傍らに立って、自分の行いの暗い裏側をじっくりと見つめた。「漆黒のように真っ黒だ。お望み通りに。どう思う？」

ラザルスは疲れたように微笑んだ。「どうもありがとう、またしても。」彼は背を向け、傾斜した床を登り、船倉の前方、高く乾いた状態で置かれている船体板の方へ向かった。船首近くで、彼は膝をついて腹ばいになり、それからゆっくりと翼を整えた。その後、暗く静まり返った海で、打ち寄せる波と軋む船体の音にうとうとしていたが、突然息を吸い込み、身じろぎをした。「メディチ？」

「はい、ラザロさん？」

「あなたは疲れを感じることはありませんか？」

「ある意味ではそうですが、あなたが想像するのとは少し違います」とメディチは答えた。

"どうして？"

幽霊は、おそらく考え込んでいるのだろう、言葉を止めた。「それはおそらく例によって最もよく表現されるだろう だからでは、こう考えてみてください。人生の中で、深い喪失感を味わい、生きる気力さえも失ってしまったような、重苦しい悲しみに襲われた瞬間を思い出していただけますか？

「できるよ。」

「素晴らしい」とメディチは言った。「さあ、もしよろしければ、悲しみをその瞬間から切り離し、意志の喪失だけが残るようにしてみてください。そうすれば、魂が疲れ果てた時にどのような気持ちになるのかも、あなたも分かるでしょう。」

「メディチ家？」

"はい？"

「永遠に飛び続けることはできますか？ 疲れることはありませんか？」

「試したことはない。それに、あの空飛ぶヤギのような天使が、貪り食えるものなら何でも食べようとしているのだから、そんな危険は冒したくない。」

「アザゼル？」

「同じだ。アザゼルとアズラエルが永遠に空を飛ぶ手段を持っていたとしても、それほど驚かないだろう。彼らは世界を旅し、上下に飛び回り、私のような迷える魂を探し求めているのだから。」

"上下？"

幽霊はくすくす笑った。「私は長年の間に天使のやり方を少し学んだ。」

死んでしまった。結局のところ、私が彼らの間を行き来し、この世界をさまよっているにもかかわらず、彼らはまだ私を捕らえることはできていない。私は何百もの天使を見てきたが、彼らは皆、霊や亡霊の姿をしている。私たちがこの二つについて語るの、彼らが彷徨える魂を探し求める存在だからにすぎない。

「つまり、これらの天使たちは、まだこの世を去っていない魂を探し求めているということか。私の理解では」とラザルスは述べた。精霊は頷き返した。「アズラエルから聞いたところによると、魂を求めるのはアズラエルとアザゼルの二人だけだ。もう少し気楽に説明してもいいかもしれないな。彼は顎を撫で、それから指を上に向けて振りながら続けた。「この二人は創造の大邸宅の神聖な召使いのようなもので、ゴミや雑多なものを集めて、大邸宅をきちんと清潔に保っているのだ」メディチは肩をすくめた。「彼らは私を探してあちこち行くが、私はそこにいない。彼らが私を罠にかけようとする方法と場所を知っているからだ。私のソフィアの墓は、アズラエルが蛇のように待ち伏せしている場所の一つだ。だが、彼女は私を捕まえるのと同じくらい素早く私を逃がしてくれる。それは季節ごとの遊びのようなものだ。私は彼女と一緒にいくつもりだと装うが、彼女はまた私を逃がしてくれる。本当にラザロよ、私は自分が地上をさまよう最も古い魂なのではないかと、しばしば思ったものだ」メディチは木を叩いた。「どうか教えてください、賢明で翼のある従者よ。二世紀も経ったのに、なぜ神は私を地上から完全に消し去らないのか、その理由をご存知でしょうか？」

神様はきっと私を見てくださっていると思います。床に散らばったゴミやもつれた髪の毛を誰かが見ているのと同じくらい簡単に。あなたはどう思いますか？なぜそう思うのですか？

ラザロは一度鼻を鳴らした後、一定のリズムでいびきをかき始めた。

~*~

太陽は高く昇り、双子の島の上空に沈み、座礁した幽霊船を真昼の光で照らし、前夜に生えたばかりの藻を茶色く染めた。甲板にはカモメがさえずりながら集まり、エラ呼吸をする魚の肉をむさぼり食っていた。こうして、また一日分の魚眼魚が燃えるような空の下で干された。しかし、太陽の光が船底に差し込むことは一度もなかった。ラザロは涼しく薄暗い船内でぐっすりと眠っていたのだ。

正午から午後へと移り変わり、西の島の影が船を覆い始めた。

夕暮れが訪れ、風が止み潮が満ちると、カモメたちは再び船を離れて本土へと飛び立ち、また一日が終わりを告げようとしていた。

干したばかりで目がぱっちりとした魚。

東の海から大きなオレンジ色の月が昇り、その涼やかな光を海に投げかけた。そして、夜明けの最初の光に目覚める雄鶏のように、ラザロは目を覚まし、夕暮れ時の薄暗い色合い。

「ぐっすり眠ったようだな。」メディチの声が船倉に響き渡った。

ラザロは意識を取り戻そうとした。彼は起き上がり、うめき声を上げ、目をこすり、

彼は床板の跡がはっきりと残る頬を撫でた。すると、船尾近くにメディチの姿が見えた。両手でベストの縫い目を握りしめ、指を組んでいた。メディチは膝まで水に浸かりながらも、威厳のある様子で立っていた。

「こんばんは。」メディチは挨拶をし、波一つ立たない水面から彼の方へ歩み寄った。「よく休めましたか？」

"私は。"

「まあ、どちらか一方が休めたと聞いて嬉しいよ」とメディチは不満を漏らした。「君のいびきのせいで、私は一晩中眠れなかったんだから。」

「メディチよ、許してくれ。もしかしたら私は」

メディチは笑った。特に、眠っている幽霊という発想には笑みをこぼした。

ラザロはわざとらしく立ち上がった。ナイフのような目でメディチを睨みつけた。「今、笑うべきなのか？」

青ざめたメディチはぴたりと足を止め、それまでの楽しい表情は消え失せていた。ラザルスは驚いた幽霊の姿を見て、くすくす笑った。

「君には本当に騙されたよ」とメディチはラザルスを指差しながら認め、再び歩き出した。

ラザロは満足げな笑みを浮かべた。「あなたにも良い夜を。」そう言って、彼は軽く頭を下げた。

メディチはラザルスの前に立ち止まり、軽くお辞儀をした。「ようこそ、エデンの宝石号へ。」

「誰の宝石？」

「エデンだ」とメディチは素早く言い返した。彼はラザルスの肩越しに船首を指さした。「それが船の名前だ。お前が眠っている間に、私はさらに詳しく調べてきた。そして、その現状は、その過去を多く物語っている。」

"どうして?"

メディチは両手を後ろで組み、かかとで体を揺らし、ニヤリと笑った。「教えてあげよう、ラザロよ。」彼は考え込むように床に視線を落とし、狭い円を描くように歩きながら、自分の発見を語った。「どうやら、彼女は布地や衣服の部品を積んで水面に重く沈んでいた時に座礁したようだ。彼女のぼろぼろになった積荷のほとんどは、今や岩だらけの海底に横たわっており、おそらく乗組員が荷物を軽くしようとして捨てたのだろう。また、彼らは彼女を岩から引き離そうと、別の船で彼女を後ろに引っ張ろうとしたようだ。」メディチは間髪入れずに目を丸めた。「明らかに、彼女はまだしっかりと岩に張り付いているのだから、何事もなかったのだろう。」

私は彼女の数多くの結び付けられたロープからそうした努力の跡を読み取った。その中で最も太いロープは、甲板の上にきちんと整列して置かれており、切れた端は船尾に均等に垂れ下がっていた。

そしてもちろん、神の御手でもない限り、より大きな船だけがより小さな船を引っ張ることができるのだ。

メディチは立ち止まり、ラザルスをじっと見つめてうなずいた。「彼女の大胆さと

せっかちな船長は、浅瀬を勢いよく進み、誇らしげな風と満帆で、この対岸の島々の間を縫うように進路を取った。どんなに誘惑に駆られようとも、どんな代償を払おうとも、島々を避けて航行する方が賢明だったかもしれない。」そして彼は肩をすくめた。「とはいえ、かつては宝石のような船だったのに、今は皆に捨てられ忘れ去られ、最期を待っている。

しかし鳥や魚は。そして私たちは、彼女が彼女の沈没した積荷。」

「あなたは細部にまで気を配る鋭い目をお持ちですね」とラザロは答えた。「私も機会があれば同じように努めています。」

「まあ、それはあくまで観察に基づくものだからね。もしかしたら、全部間違っていて疑っている可能性もあるよ。」

「そうは思わないね」とラザロは微笑みながら言った。「君は些細な兆候から最も深い真実を見抜くうだからね。」

メディチは眉を上げた。「お言葉はありがたく頂戴いたします。しかしながら、真理を知ることができるのは、神の恩寵によるものだけです。」彼は頭上を指差した。

「さあ、地上に出て、夕暮れの眠りから世界を目覚めさせようではないか？」

「ああ、確かに」とラザロは答えた。彼は向きを変えて垂直のケースによじ登り、層状になった板をどかすと、澄み切った明るい空が現れた。そして、用心深く姿を現すジリスのように、ラザロは月明かりに照らされた甲板と目線の高さだけを上げて、その表面を覗き込んだ。幽霊の姿が慌ただしく上昇していくのを発見した。それは頑丈なデッキを突き抜けてはっきりと現れた。

「さあ、おいで。今夜は君のものだ」とメディチは言い、ラザロに全身全霊で出てくるように促した。

ラザラスは船倉から出る前にスペクターを睨みつけた。彼は藻に覆われた甲板を慎重に歩き、干し魚の残骸、バラバラになった木片、あちこちに絡み合ったロープの網をくまなく調べた。そして、上へ、船体全体に降り注ぐ。

メディチは静かに彼の後をついて行き、その視線は天空に釘付けになっていた。

ラザロは警戒しながら船首の隆起した部分へと歩み寄った。本土から海に向かって吹く暖かく一定の風に、彼の服はひらひらと揺れた。彼は船首の近くで立ち止まり、竜骨を調べた。そこには女性の裸の後ろ姿が部分的に彫られていたが、腰のあたりで壊れてしまっていた。「宝石だ」とラザロは呟き、甲板を見回して上半身の残骸を探したが、見つけたのは砕けた木片と散乱したロープだけだった。彼は海の方を向き、風になびく髪を顔から払い、頭頂部に押し当てた。船首甲板の新たな見晴らしの良い場所から、海側の島の北側の低い方を見回すと、夜明けとともに輝く月が見えた。赤みがかったぼんやりとした光輪がオレンジ色の球体を囲み、天体に不吉で幽霊のような様相を与えていた。ラザロは微動だにせず立ち尽くし、

彼は目の前に広がる深く険しい海峡を前に、まるで彫像のように立ち尽くした。そしてついに、「海の深さはどれくらいですか？」と尋ねた。

返事がなかったので、エルジョは振り返ると、幽霊が外見上の計測に没頭しているのを見つけた。メディチはラザルスに背を向け、南東の空に向かって腕を上げていた。彼はV字型に立てた2本の指の間から覗き込み、彼はそれを核心、つまり星々に対する固定された視線に合わせました。それから彼は指を合わせ、横に向け、腕を下ろして指し示す一対の指を指先は地平線と水平を保っていた。そして、一瞬の動きで、遠くのコルシカ島の正確な方向を見抜いた。「カラスが飛ぶように、我々も飛べるだろう」と彼は腰に手を当て、漆黒の海を見渡しながら独り言ちた。

「メディチ家？」

ゴーストは、まるで水没して突然驚愕した芸術の巨匠のように、突如として非凡で抽象的な推論の世界から引き離されたかのように、くると身を翻した。「ああ、ええと、ラザルスさん？」

「海の本物の深さを知っていますか？」

「私はそう信じています」とメディチは答えた。「そしてそれは本当に場合によります、ラザロ。あなたのブーツの高さほどの深さしかない部分があれば、雲の高さほどの浅さしかない部分もあるのです。」彼はラザロの手前で立ち止まり、詳しく説明した。

「海の地形は、最高峰の山々や深い谷など、陸地の地形とよく似ていると言えるでしょう。さらに、世界の水は波のように流れ、それは地球のエーテルが風となって吹くのとよく似ています。」

ラザルスはうなずき、海を見渡して、その深淵を新たな光で捉えた。彼は天を見上げ、確認を求めた。「雲の高さと同じくらい深い、ということですか？」

「確かに、さらに奥深く、その最果てまで達している。」

「どうしてそれを知っているのですか？」

メディチはため息をつき、腕を組み、踵をついて後ろに体を揺らした。「これは私が知っていることだ。世界がそう教えてくれたからだ。肉体を持たない長い年月の中で、私は地球の多くの面を見てきた。あらゆる地形を、高いところも低いところも、行ったり来たりして旅した。最も高い雲や最も高い山から、最も低い海や地底の最も深い水まで、私は地獄の所在を探し求めた。確かに、海は広大で、多様で、深く、まるで暗く陰鬱な別世界のようだ。」

ラザルスは甲板の縁から下を覗き込んだ後、メディチの方を振り返って言った。「表面を見る限り、それほど深くは見えませんね。」

「本当だ」とメディチは答え、両手で祭服の縫い目をつかみ、

誇り高き政治家の姿勢をとった。「表面上は、ほとんどのものは平凡で、脅威がなく、おそらく平和にさえ見える。しかし、ありふれた石でさえ、ひっくり返せば、その下に多くの神秘的な側面や隠された仕組みが現れることが多い。たいていは魅力のないものだ。」彼は、詮索好きな耳やスパイの傍観者がいないか探しているかのように、船の甲板を念入りに調べた。それから彼はニヤリと笑ってささやいた。「かつて錬金術師だった頃、私は多くの未開の石をひっくり返した。いわば、世界の驚くべき未知の多くを掘り起こすために駆り立てられたのだ。そして、教会が何も知らなかった間、私の仕事は詮索好きな目から秘密にされていた。」彼は乾いた笑いを漏らした。

「なぜ、あなたは自分の作品を隠したのですか？」とラザロは尋ねた。

メディチは、大げさな失望の表情で、息を切らし、今や生命を失った両腕を傍らに置きながら、彼は言った。「村人の常套手段だ。特に、ほんのわずかな夜の影にも怯え、自分の影を悪魔や魔物と見なし、密かに魂を奪おうと狙っていると信じるような連中はそうだ。かつて私は、教会が広めたそんなたわごとが蔓延る町に住んでいた。そして、古代の霊薬と、死の苦しみを癒すその秘薬を求めて、当時の錬金術師として、私の研究のどんな些細なことまでも極秘にしなければならなかったのだ。」

「しかし、病を癒すことは良いことなのに、なぜ秘密にする必要があるのか？」

「なぜかって？」メディチは信じられないといった様子で大笑いしながら尋ねた。「町の人々の疑念を招き、共同体の恐怖を煽り、教会会議の前に立たされ、異端と魔術の告発に対して弁明を強いられることになるかもしれないからだ。その後、私は市場広場に連行され、タールで洗礼を受け、火をつけられ、町の輝かしい教会の灯火の模範として晒されることになるだろう。」

ラザロは目を細めてその生々しい映像を見つめ、頭の中で混乱していた。

メディチは咳払いをした。「ラザルス、君が知っているかどうか分からないが、教会は錬金術や人相学、あるいはそれに類する学問を、正式な監督者の任命なしに実践することよりもはるかに軽微な罪で、人々を生きたまま火あぶりにするのだ。」

「確かに、そのような火刑の話聞いたことはあります」とラザルスは認め、地下墓地の囚人の運命について思いを巡らせた。「骨まで焼かれる、と。」

「灰と塵にまで」メディチは嫌悪感を滲ませながら断言した。「彼らは、従順な愚か者を教皇の支配下に置くために焼かれるのだ。」彼は首を振った。「私が最後の海外航海に出発する前年、町の広場は新月のたびに明るく照らされた。公会議で告発された者たちの焼死体で明るく照らされたのだ。そして、儀式的な火刑はあまりにも日常的に行われたため、町の人々は身を隠すようになった。」

家々を訪ね、密かに教会を非難する声が上がった。私も同感だった。多くの人ほど熱烈ではなかったものの、客人たちには集団処刑への憤りを率直に表明することを許した。しかし、ある事件が起こり、町の有力者たちでさえ激怒した。私はひどく腹を立て、ソフィアは涙を流した。告発された少年を知る多くの人々も同様だった。少年は教会会議によってひどい仕打ちを受けたのだ。

「少年は何をしていたのですか？」とラザロは尋ねた。

「我々が知る限り、特に問題はありませんでした」とメディチは弁解するように答えた。「ただ、その少年は同年代の子たちとは少し違った振る舞いをしていました。そして、おそらく容姿も同じくらい奇妙だったでしょう。彼はとても活発で落ち着きがなく、気が散りやすく、しばしば大げさに、そして急いで話すので、言葉を言い終える前に本来の意図を忘れてしまうことがよくありました。しかし、私は彼には同年代のいたずら好きな少年たちよりも、はるかに良い資質があると心から信じていました。彼の名前はステファンで、ソフィアを通して、私は彼と、同じく印象的な母親のマルダレーナの両方をとても好きになりました。」メディチは船の縁に歩み寄り、両手をポケットに突っ込んだ。彼は海岸沿いの島のむき出しの岩をじっと見つめた。

メディチはラザロに背を向けたまま続けた。「ステファンの両親は善良で、神を畏れ、義務を果たす人々でした。彼らは立派な貴族でしたが、

かなりの投資を行い、より 何と言いますか おそらく、より慎重な生活様式に陥ったのでしょう。」メディチは肩をすくめた。「まあ、彼女たちはただの貧乏人にまで落ちぶれたわけではありませんよ。かつての貴族の知人の多くが、都合よく次第に連絡が取れなくなっていったとはいえ。それでも、ソフィアとマグダレーナは長年の間に姉妹のように仲良くなっていたので、私たちの家は彼女たちに開かれたままでした。金持ちだろうが貧乏だろうが、神と悪魔が一体となっても、ボタンと糸の間の隙間よりもさらに二人を引き離すことはできなかったでしょう。それに、ソフィアが私の財布を持って街の店に行き、二人で贅沢三昧をしていたのに、マグダレーナにとって富など何の意味があったでしょう？ソフィアは彼女を喜ばせようと必死でしたが、私は財布の事など気にしていませんでした。結局のところ、私の規律は最も多くのことを求めていたのですから。」

おかげで、ソフィアは自分のための十分な時間を持つことができた。そして、私の仕事には何の影響もなかったため、マグダレーナとステファンは、私がなかなか割けないほどの愛情をソフィアに注いでくれた。こうして、すべてにおいて良い結果となったのだ。

幽霊は振り返ってラザルスに近づいた。「いずれにせよ、ステファンは母親のどこか遠いノーラ ンダー訛りを除けば、母親の特徴を多く受け継いでいた。彼の髪は私が今まで見た中で最も明るい色で、ほとんど白だった。そして彼の肌は、母親よりもずっと青白かった。

ソフィアの透き通るような白い肌さえも霞ませ、彼の青い瞳の深い輝きは、まるで炎の前に置かれた青い水晶のように、不気味な光を放っているように見えた。「それは、ラザルス、あなたのあの不思議な視線とよく似ていたわ。とはいえ、彼には外見以上のものがあったのよ。」

「ステファンは若くして非常に賢く、ずる賢かった。しかし、心の奥底では おそらく彼の魂にさえ 彼の存在そのものが恐ろしい呪いを背負っているように感じた。そこには神聖な意味が込められていた。実際、私はほんの一瞬彼の行動を目撃しただけで、すっかり困惑し、畏敬の念に打たれた。少年は、特に多くの人々が自我のバランスを失ってしまうような状況において、人を不安にさせるような、並外れた方向感覚を示していたからだ。彼の紛れもない能力 私が厳格かつ規律正しく理性と熟考を実践してきた者として、その能力を断言できる にもかかわらず、彼がそれを繰り返すたびに、私は常に不安を感じた。そして、ステファンがその奇妙な才能を発揮する数々の場面で、私も同じ感覚を覚えた。自分自身が二つの相反する部分の間で引き裂かれ、互いに和解しがたい対立を抱えているように感じたのだ。しかし、その引き裂かれた感覚は長くは続かなかった。私の思考は、相反する対立する二つの部分の間に、等距離の新たな空間に落ち着くように思えたからだ。メディチは額に手を当て、熱の兆候がないか確かめた。彼は星空を見上げながら告白した。「そして、新たに訪れた静寂という、まるで死の空間の中で、理性と感情のせめぎ合いを除けば、私は遠くからステファンの行動を安全に見守ることができたように思えた。そして、少年が私の衰えゆく感覚を、心地よくも厄介な無感覚の状態へと導いていくのを、驚きをもって見守っていたのだ。」彼は手を下ろし、ラザルスをぼんやりと見つめた後、首を横に振った。

「ステファンは何をしたんだ？」ラザルスは尋ねた。

「ええ」メディチは息を吸い込み、明らかに心配そうな表情を浮かべながら言った。「ステファンは突然発作を起こすことがあり、その時は自分が意識を失っていました。発作はしばしば長く続き、何も知らない傍観者にとっては不安になるほどでした。彼は両腕を広げ、その場でくるくると回り、真上を見つめていました。大きな声で呼びかけたり、手を叩いたり、直接触れたりしても、彼の注意をそらすことはできませんでした。少年の見上げた顔に手を置くと、彼はその下で回転しました。しかし、誰かが彼の腕を遮ったり、回転を妨げたりすると、ステファンは回転を続けられるようになるまで、叫び声をあげて激怒しました。実際、そのような瞬間、彼は 彼は自分の周りで起こったことを全く知らず、その後も何も覚えていなかった。まるで目に見えないベールが彼を覆い、彼の感覚を世界から完全に切り離れたかのような状態だった。そして、その奇妙で、まるで切り離されたかのような状態で、彼はただ回転し続けるだけだった。ほんの一瞬でも、

彼の回転する姿は私の心を揺さぶり、立っている時でさえ足場を失いそうになるほどだった。しかし、マグダレーナとソフィアは少年の頻繁な回転にはとうに慣れており、気づかないふりをしていた。」メディチはラザルスに指を突きつけた。「もし少年が彼女たちの頭の上に登って回転し、私が彼女たちの間に『回転するステファン』がいることを少しでも示唆したり指摘したりしたら、私は間違いなく

それを彼らに指摘したら、怒りは倍増した。あの二人はいつもそうやって私に陰謀を企てていたんだ。

ラザロは口を固く閉ざしてニヤリと笑い、口から一息吐き出した。

鼻。

「笑うべきなのか？」メディチは気取った口調で尋ねてから続けた。「とはいえ、簡単に無視したり、見て見ぬふりをしたりすることはできなかった。特に、手の届く範囲に数多くの貴重な器や台座があり、屋敷の広間の壁一面に繊細な工芸品が並んでいるのだから。見て見ぬふりはできなかったのだ。」

メディチは腕を組み、うなずき、秘密を打ち明けるかのようにラザルスに身を寄せた。「とはいえ、ステファンが発作を起こし、女性たちがどこかへ行ってしまうと、私と息子だけが残されることもありました。」彼は顎を少し前に突き出し、これから話す秘密の話をほのめかした。ある時、ステファンはまるで魔法にかかったように、入り口の真下でぐるぐると回り始めました。両腕を広げた彼の指は、石柱をほんのわずかに通過するばかりでした。それに気づいた私は、少年と石柱のそばにろうそく台と椅子を置き、明るい照明の下で、彼の指と近くの石柱の間をわずかな隙間を観察しました。彼はぐるぐると回り続け、私は彼が回転するたびにできるわずかな隙間から目を離しませんでした。指が石柱に近づいたり遠ざかったりするわずかな隙間の変化を探しましたが、指が通過するたびに、その隙間に全く変化は見られませんでした。ステファンは長い間、その場で完璧に回転し続けました。それは驚くべきことであると同時に、不可解なことでもありました。メディチは一瞬の沈黙の後、肩をすくめてこら認めた。「私は少し酔っていたんです。ワインに酔って、少し酔っていたのかもしれませんが。女たちが戻ってきて、私がステファンの動向をずっと観察していたのを見つけた時には。」幽霊はうつむき、悲しげに顔の横をこすりながら続けた。「女たちは私を屋敷から追い出し、椅子とワインボトルを外に投げ捨て、木々の間の隙間を測ってこいと言ったんです。」

ラザルスはくすくす笑い、半ば平静を取り戻して尋ねた。「教会はステファンに、発作を起こした件でどんな処分をしたんだ？」

「ああ、それはステファンの発作のせいではなかった。ステファンは回転するときも黙っていた。」

シュテファンが口を開くと、教会は彼を疑うようになった。この少年は本当に口達者だった。その点では、彼は母親によく似ていた。彼が不敬な言葉遣いをしたり、下品な言葉を使ったりしたと言いたいわけではない。むしろ、彼は非常に敬虔で、言葉遣いも明瞭で、最も辛辣な発言でさえも愛想よく振る舞った。シュテファンの問題はこうだ。何か考えが頭に浮かぶと、その考えが完全に定着する前に口に出してしまうのだ。時折、考えが表現したいという抑えきれない衝動に追いつくまで、彼は口をつぐまなければならなかった。実際、彼は考えをじっくりと吟味し、その価値や適切さを判断できるほど長く考えを巡らすことができないようだった。そのため、彼の心の中で何か考えが形成されると、彼の落ち着きのない様子を通して、周囲の人々の心にも同じようにその考えが伝わってしまうのだ。

彼は舌鋒が鋭く、他のすべてを犠牲にしてでも、必ず自分の考えを口にした。

ステファンのこの一点には、彼の回転発作以上に、特に彼が「ヴィクトル」という名の、身近で頻繁に会う友人と公然と会話しているのを見て、私はひどく苛立ちました。」メディチは両手を腰に当て、唇をすぼめて頷いた。「そして、ステファンの回転発作と同じように、ソフィアとマグダレーナは、少年が友人と交わす露骨で絶え間ない会話を聞かないふりをしました。私は聞かないように努めました。しかし、女性たちがステファンを促して、ヴィクトルがまるで私たちの家族の一員であるかのように、友人と個人的で詳細な会話をさせると、私は口をつぐむのが本当に大変でした。女性たちはすぐにステファンにささやき、ヴィクトルに散歩に同行したいかどうか尋ねるように言うのです。

邸宅の敷地内を散策したり、馬車に乗って町へ行ったり、あるいは私たちと一緒に食事をしたりすることもできます。

私のテーブルの端の方です。」

ラザルスは困惑した様子で首を横に振った。「なぜヴィクターの存在がそんなに君を苛立たせたんだ？」

メディチは眉をひそめ、「ヴィクトルは実在しなかった」と断言した。

「しかし、あなたはヴィクターがステファンの友人だと主張しましたよね？」

「私は、ステファンにはヴィクターという名の親しい友人がいると言いましたが、その友人は実在しませんでした。さらに、ステファンはこの『ヴィクター』以外には友人を認めようとしませんでした。」

彼はそれを、完全に自身の想像力から生み出したのだ。」

「そして教会はステファンが友人だと知ったのですか？」とラザルスは尋ねた。

「確かに、ほぼ即座に」とスペクターは断言した。「こうして教会評議会はステファンを召喚し、宣誓供述と詳細な証言を求めた。事前に私は少年にヴィクターの存在に関するすべての証言を撤回するよう説得を試みたが、聴聞会の間、彼の落ち着きのない舌は評議会のあらゆる質問に、露骨に、そして何の配慮もなく答えた。結局、彼は偽りの友人を解散させることを拒否した。それどころか、彼は評議会の長老たちを激怒させ、『老人は苦しむ』と言って、彼らが弱者かもしれないと示唆したのだ。」

「視力の衰え、聴力の低下、髪のかげれ、皮膚の衰えなど、あらゆる面で衰えが見られる。」メディチは首を振った。「ステファンと老いの具体的なことについて話すべきではなかった。本当に、あの子は口が軽かった。」

しかし、ステファンが彼らの前に堂々と立ち、ヴィクトルとひそひそ話をするまでは、教会は公然と彼を非難しなかった。教会は直ちに彼を厳重な監禁下に置き、観察するよう命じた。その後、彼らはステファンが回転発作を起こしていることを発見した。わずか一日後、教会の長老たちはマグダレーナを呼び出し、調査結果の記録を証言させた。絶望と深い悲しみに打ちひしがれたマグダレーナは、私の同伴と、町の名医である私の影響力を懇願した。そこで私は、ステファンを私の特別なケアのもとで釈放するよう教会を説得しようと、彼女に付き添って教会の議場へ行った。しかし、教会はすでに少年の容態について評決を下していた。正式な布告の中で、彼らはステファンが稀な病に罹患しており、「一般の医師の卓越した能力では到底及ばない、極めて特殊な治療法」が必要であると述べていた。

「判決はどうだったの？」

「どんな呪術を処方しようとも、それ以上のこともだ」とメディチは不満を漏らした。「ステファンの場合、彼らは彼が肉体的な支配下に苦しんでいることを発見したと主張したが、サキュバスに憑依する。」

「それで、サツェルって何なの…えーと…」

「それは、公会議が明確に説明したように、霊的な誘惑によって人間の男性に取り憑き、その本質をすべて吸い取る、女性の悪魔の霊である。教会は、その女悪魔がラミアムブス、あるいはそれに類する名前と呼ばれていることを発見し、慎重な聖職者による検討の結果、悪魔の霊が何らかの方法でステファンの夢に侵入し、彼の魂を侵す前に、単に『ヴィクター』と名乗って少年に正体を現したという簡潔な結論に達した。」

ラザルスは肩をすくめた。「ヴィクター？彼は息を吸い込んだ。「教会はどうやって悪魔の本当の名前の『ラミア』を知ったんだ？」

「ムブスだ」と幽霊は名前を言い終えた。「評議会は、ある著名な司教の教皇時代の評判について正式に言及した。その司教は公然と『ワームの犬』とか、そんな感じの名前で呼ばれていた。彼らが主張した調査結果の詳細は未だに思い出せない。特に、彼らが怒れる信徒たちを説得し、鎮めるために、急ごしらえの説明をでっち上げたのだと私は確信しているからだ。」

ラザルスは疑念の表情を浮かべながら目を細めた。彼はメディチの主張に反論した。

「『ヴォルムスの規範』は記憶にありませんが、読んだことはあります。」

ヴォルムス司教によって書き記された聖典の一節のことでしょか？ もしかして、それがあなたの意図した参照箇所だったのでしょうか？

「聖職者、司教、虫けら…教会会議の正確な言葉は覚えていない」

メディチは軽蔑の表情を浮かべ、指をだらりと振り回しながら認めた。

「結局のところ、私は錬金術の技術に精通し、熟練した医師として忠実に務めていましたが、典礼の作法についてはほんの少ししか知りませんでした。」彼は首を振り、ため息をついた。「それでも、ステファンは虚弱な少年でした。度重なる鞭打ちと開いた傷によって、彼の血は変色していました。私は教会に、厳格な聖職者の監督下でステファンを診察し治療することを許可してくれるよう懇願しましたが、評議会は少年への面会を一切拒否しました。その代わりに、私の真摯な忠告にもかかわらず、教会の司祭や医師たちは「頭皮への油塗り」と厳格な「ヒル療法」を処方した。

「頭に油を塗るといふのはどういうことですか？」とラザロは尋ねた。

「これは聖職者の厳密な儀式であり、教会の任命を受けた3人の代理人が、憑依された人の後頭部を聖別された油の入った器に浸す。最初の代理人は、悪霊の存在を完全に洗い流すため、対象者の目、鼻、口に油を塗りつける。2番目の代理人は、油を塗っている間、近くにいる悪魔や魔物が油を汚さないように、祈りの言葉を口に出して唱える。同時に、3番目の任命された代理人が、硫黄の香りと崇高な煙を途切れることなく吐き出し、憑依された人の顔の穴に正確に吹き込む。全体として、この過程は非常に長く複雑で、3日間3晩にわたって継続的に行われる必要がある。」

「その話は聞いたことがあるが、ヒルを使った治療法とは一体何なのか？」とラザロは尋ねた。

「ヒルは川に生息する虫のようなもので、皮膚を食い破って体液を吸い取る。教会の医師たちは、少年の股間に大量のヒルをくっつけて、毒をすべて吸い出そうとした。それがステファンの容態が悪化したという最後の知らせであり、それから3日後に彼は埋葬された。」

ラザロは困惑して頭を引いた。「彼の傷は背中ではなかったのか？どこに

彼らは彼を鞭打ったのか？

「彼らは何も語ろうとしなかった。そして私たちは少年の遺体も、寂しげな墓石も目にする事はなかった。

ステファンの最後の安息の地は、私たち全員にとって消えゆく謎となった。」『スペクター』

肩をすくめた。「とはいえ、その少年は虚弱で、独特の孤立した性格をしていたが、それでも彼は

彼は、奇妙ではあるが真実の心と精神以外には、決して憑依される事はなかった。ともかく、彼は厳重に守られた墓に葬られ、幽霊の友に永遠に忠実であり続けた。そして私は、ステファンは今、天国で安らかに過ごし、我を忘れて、おそらく永遠に友人のヴィクターと語り合っているのだらうと推測している。

「あれは暗黒の時代だった」とラザルスはため息をつきながら言った。

「それは全ての人にとって暗黒の時代だった」とメディチは断言した。「特に、教会への十分の一税を容易に納めることができなかつた人々、愚か者も賢者も関係なく、そうした人々にとってはなおさらだった。そして、我々のように納めることができ、学識があり、教会の長く広がる暗い影の中に一筋の光や希望を差し伸べようとした者にとっても、それは実に恐ろしい時代だった。」

「しかし、あなた方は財力があるのだから、十分の一税を払うのは容易だったはずだ」とラザロは尋ね、メディチ家は他の人々に比べて苦難が少なかったのではないかと示唆した。

スペクターはうなずいた。「確かに、私は寛大すぎるほどの十分の一税を納めていたにもかかわらず、うまくやってきた。教会は特に富裕層を優遇していた。彼らは富裕層の財産から、彼らをその地位に留めておくのに十分な額だけを要求し、同時に重税を課すことで、彼らがそれ以上裕福にならないようにしていた。教会が富を増やすことを許したのは、教会自身、その財政および教皇の代理人、そして忠実な貴族の家臣だけだった。それでも私は、聖職者たちを送り出す前に慈善的な十分の一税と優しい言葉をかけ、彼らが歩いた地面そのものを静かに呪っていた。」

「密かに、私は教会のこれらの独善的で自己中心的な男たちを、実に軽蔑すべき存在だと感じていました。私は彼らを軽蔑し、彼らを、接触するすべての人々の物質的な財産と努力から吸い取る、怠惰なヒルの大群に例えました。そして、そのような物質的な利益と引き換えに、彼らは単なる無益な権威の言葉、高価な赦し、そして天国の偽りの約束を提供するだけでした。実際、彼らは、次のような単なる戯言を口にする代わりに、現実的で具体的な財産を期待していたのです。

宗教的および政治的なレトリックのことだ。農民とその妻から数匹の野ウサギと摘み取った野菜を没収しようと、領主とその夫人から金貨の入った財布と数頭の馬を没収しようと、これらの男たちは、自分たちの言葉、祈り、約束 彼らのたわごと を、どんな金額であれ、どんな人に課せられた徴税と同じくらい価値があると考えていた。結局のところ、彼らの目には、永遠の命の約束は、貧しい人にとっても王にとっても同じくらい価値があるのだ。そして、不死の概念は、飢えた胃袋の空腹を一時的に満たし、最も固い財布の紐を緩めることさえあるかもしれないが、苦い真実はこうだ。祈りを捧げて町へ馬を走らせ、約束を果たそうとする前に、言葉で腹を満たすことはできない。教会の怠惰で無能でたわごとを言う男たちでさえ、このことを知っていた。そしてまさにこれが、彼らが自分たちで用意することを拒否したものを、皆から要求した理由だった。狩猟で得た獲物、収穫した野菜、よく育てた馬、家族で稼いだ財産、あらゆる職種の鍛冶屋の汗と労働。そして彼らが蓄積した富はすべて、

彼らは、貧富を問わず、すべての人々の努力を、教会に生涯にわたって納めるべき十分の一税の正当な支払いとして主張した。

「十分の一税だと？」メディチは信じられないといった様子で尋ねた後、新たな論理展開を始めた。

「神のために聖別される？教会のこれらの人々は、自分たちが神だと信じていたのだろうか？」

スペクターは、大げさな思索の仕草で顎を軽く撫でた。それから彼はくすくす笑い、声に出して計算を確認した。「私の記憶が正しければ、神は飢えの苦しみを味わうことはないし、馬に乗って行き来することもないし、街へ出かけて贅沢な買い物をするのもない。」メディチの気分は暗くなり、ラザロをじっと見つめた。「いや、これらの十分の一税は、教会の聖職者とその親しい者たちの、ヒルのように贅沢な生活のために取っておかれたのだ。そして私自身は、

聖職者たちは、集団として、敬虔なすべての人々の富を没収しようと企む、規律正しい泥棒の集団に過ぎないと見なされた。彼らは、まるでゆっくりと衰弱させる病気のように、まさに広がるよう行動した。

そして、無制限の感染。彼らの方法は、私が証言できる通り、段階的にはあるが、私にとって未知のものではなかった。まず、聖職者たちは一般の人々の心を汚染し、第一に、それは一般の人々の心を墮落させ、不必要な疑念、不安、自己不信の種を植え付ける。第二に、聖職者たちは、影響を受けた人々を定期的に管理することで、彼らの以前の功績や美徳の感情を、弱々しい無価値感や罪悪感に置き換えることを明確な目的として、彼らを着実に墮落させていく。

最後に、人々が最も弱体化し、世界のあらゆる醜悪で恥ずべき出来事の唯一の原因と結果が自分たちにあると信じるようになったとき、聖職者たちは、彼らの継続的な物質的価値に依存し、そこから着実に搾取することで、彼らをほとんど死に至らしめるまで（ただし完全には死なせないまで）食い尽くそうと動き出すだろう。そして最後に、聖職者たちは

この新たに得た価値を利用して、かつては満足していた無知な人々をさらに多く汚染し、地上の利益を拡大する。実際、この大量かつ反復的な感染方法は、集団的隷属という疫病のように広がるように設計されており、すべては世俗の教会が永遠の十分の一税という形でより多くの富を蓄積するためである。

「神への十分の一税？」メディチは海に目を向けながら、独立した手すりに寄りかかり、再び尋ねた。「教会は謙遜も共感も知らず、

彼らの飽くなき欲望は、農民のわずかな野菜かごの没収から、地方の3頭に1頭の馬の押収に至るまで、あらゆる世俗の財産を略奪することであり、その途方もない食欲は決して満たされることがなかった。そして、教会が農民の野菜を飢えた者や困窮者に与えたことは一度もなく、ましてや神への燔祭として捧げたことなど決してなかったと断言できる。彼らがそれらをどうしたか正確に教えてあげよう。彼らはそれを自分たちのものにしたのだ。肥満した司祭、司教、十分の一税徴収者たちはそれを食し、一食分以上残った食べ物は、自分たちの肥えた豚の餌桶に流し込むだけだった。農民たちは、またしても茹でた草の入ったボウルで飢えに苦しむ泣き叫ぶ子供たちを慰めるしかなかった。

ハーブの香りがほのかに漂う。

メディチはラザロの方を向き、軽くうなずいた。「私は自分の目で見たのだ。あの太った司祭とその豚小屋、そして不幸な農民たちのことも知っていた。」

メディチはニヤリと笑った。「こっそりと、飢えた家族にヤギを3匹と、2匹の子供におもちゃを2つあげたんだ。」

子供たち、たっぷりの硬貨の入った財布、そして私は彼らに決して告白しないという約束を守らせた。特に教会には。結局のところ、私はあの3頭のヤギの骨や腱、毛が豚の餌桶に落ちて、肥満の司祭とその仲間、そしてさらに太った豚の餌になるのは絶対に嫌だった。そして農民たちは非常に感謝し、

聖職者の財産記録を通さずに寄付を行ったことで、全財産没収のリスクを冒したことを私は承知していた。家族は約束を守り、この件について何も告白しなかった。そして二度と草を煮ることはなかった。その後まもなく、その家族の父親は私の親愛なる信頼できる召使いの一人となり、やがては、

「私の遺体を最終的な安息の地へ。」メディチはため息をつき、微笑んだ。「確かに、私たちは州内のすべての農民に食料を与えることはできませんでしたが、ソフィアと私は、彼らに一縷の希望を与えることができたことに、心の中で深い慰めを感じました。

少なくとも一家族は困窮している。」

ラザロは微笑んだ。「きっと彼らはあなたの親切に永遠に感謝したことでしょう。そして、ほんのわずかでも、あなたの気持ちがわかるような気がします。私もかつて似たようなことをしたことがあるのですから。」

「ほう？」メディチは顎を引いた。「もしよろしければ、お聞かせください。」

ラザロは笑いをこらえた。謙遜と恥ずかしさが顔に浮かびながら、彼はこう告白した。

「確かに、あなたの親切ほど大胆でも長く続くものでもありませんでした。」

彼は肩をすくめた。「とはいえ、かつて修道院の地下墓地に住んでいた時、飢えた囚人に自分の食べ物を分け与えたことがありました。父は私に自分の食べ物をすべて食べるように、そして牢獄に近づくことを禁じていたにもかかわらずです。そのような命令に逆らうのは気がかりでしたが、それ以上に、自分の食べ物をすべて食べてしまい、他の人を全く食べさせないという考えが頭をよぎりました。特に、分け合うのに十分な量の食事があるのに。そして、食事をしながら、もし自分の食べ物をすべて食べてしまい、飢えた人に何も分け与えなかったら、食べ物の匂いを嗅いだけで一口も食べなかった場合よりも、後でより空虚な気持ちになるだろうと分かっていました。この考えを否定することも、与えられた命令に従う義務を受け入れることもできませんでした。そこで私は義務を放棄し、密かに囚人を助け、さらには彼を監禁から解放しようとさえしました。」

「それで、あなたは彼を解放したのですか？」

「彼は拒否した。なぜなら、彼はすでに自分は自由だと考えていたからだ。」

「まあ、よく言われるように、『飢えた男が満腹になると、良い友人が生まれる』。彼はきっと

ラザルスさん、あなたの無私の努力に心から感謝します。

「そうだったと思いますよ」とラザロは満面の笑みで言った。「それにその後、たとえ自分の義務に背いたとしても、おそらくヤギを3頭丸ごと食べた時よりも、ずっと満ち足りた気持ちになったんです。」

メディチは笑った。「まさにその通りだ。私も同じように感じていた。この囚人は一体何者だったんだ？」

ラザロの笑顔は消え、彼は視線を落とした。「彼の名前は知りませんでした。しかし、彼は私に『キリストにある貧しい人』と覚えておくのが一番良いと言っていました。」

メディチの陽気さは消え失せ、彼はこうコメントした。「私が思うに、そのような謙虚で献身的な人々は、ずっと前に死んで忘れ去られてしまったが、同じように曖昧で輝かしい名誉にふさわしい称号によって記憶され、称えられるべきだろう。」

あなたがラザロと呼んで覚えているこの人は、永遠に祝福されている。それはどんな教皇も羨むような称号だが、その称号に付随するのは、誰もあえて着ようとしない平凡な法衣である。

「そうだ」とラザロは断言した。「それはふさわしい。私は彼をそのように記憶にとどめよう。」

「実にふさわしい」とメディチは言い、人差し指を一本空中に突き出してこう宣言した。

「そして、同様の精査を適切に適用すれば、この表現も同様に適切である。教会が肥満、富、雑多なもので膨れ上がった豊穡の角のように溢れているとしても、教会の人が『教会の裕福な人』と自称してそれを公然と自慢するのを聞くことは決してないだろう。結局のところ、もし彼が本当に教皇の財布から富を得ていたなら、贅沢の源泉を失うことを恐れて、それを公然と認めることはないだろう。そして、もし彼が教会の金庫から正直に富を得ていなかった教会の人であったなら、教会は彼に、彼の継続的な成功のすべてを、追加の十分の一税という形で要求するだろう。したがって、そのような裕福で敬虔な教会の人は数多く生きており、そのような定義づけられた大げさな称号を真に身につけることができるだろう。しかし、誰も正直に、そして公然とそうしようとはしなかった。なぜだか分かるか、ラザロ？教えてやろう。」

私個人の見解では、教会は、ゆっくりと窒息していく人類の腐敗を糧とする、金箔で飾られ、美化された蛆虫の山に過ぎない。そして、その一方で、無防備な人々を敬虔な毒を繰り返し分泌することで、死の淵に追いやっているのだ。

ラザロは彼を叱責した。「あなたの不敬な言葉は、しばらくの間、私をひどく悩ませてきました。」

教会とその神のしもべたちに対して、そんなに厳しい言葉を使うのは控えるべきです。

もうこれ以上その話を聞きたくない。

メディチの突然の驚きは笑いに変わった。彼は両腕を広げ、明らかに自己顕示欲を見せつけた。「私が教会会議に出席しているにもかかわらず、彼らは耳も目も開けないのに、私は彼らの前に立たされるというのか？聖職者たちは私を異端や魔術の罪で有罪とし、私の財産を没収するというのか？私は自分の肉体さえ持っていないのに？私は二度目の死を経験することになるのか？」

火？死者が死を恐れるなどということがあり得るだろうか？辛辣な言葉で地獄に落ちるとい
うのか？メディチは腕を下ろした。「試みたが、無駄だった。」

「あなたは苦々しい魂の持ち主のように見えます」とラザロははっきりと言った。「あ
なたの心が」

「神のみぞ知る」とメディチは口を挟み、ため息をついた。「私は教会に対して憤り
を感じている。それも当然だ。主なる神ご自身が、

キリストの代理人、聖職者の軍団、あるいは荘厳な大理石の神殿などではなく、主は信徒たちと交わるために、そのよ
うなものを必要としておられるのです。アダムとイブ、そして彼らの子孫の時代から、主は彼ら自身の心を通して直接
語りかけてこられました。そして今もなお、私たちが個人的に祈る祈りに耳を傾けてくださっています。教会には、そ
のような状況においてどのような役割や立場があるのでしょうか。

神とのコミュニケーションを歪めたり、墮落させたりすること以外には、何もありません。

緊張して膨張する木板のきしむ音が船中に響き渡り、甲板で休んでいたカモメの群れは打ちひし
がれて岸に向かって一斉に空へと飛び立った。メディチは前に進み出て、ラザロに少し個人的
な口調で話しかけた。「ラザロよ、私が教会に疑問を抱くからといって、主なる神を軽んじてい
るわけではないことを、あなたに知っておいていただきたい。

両者は決して一つにはならない。本来、両者は結びつくものではない。エデンの園には神殿
などなく、ただ誘惑の木があっただけだ。天におられる我らの父なる神と、自らを教会の父
と称する聖下は、太陽と月のように全く異なる存在である。権力と他者の資源に対する支配
を求める、腐敗し、日和見主義的で虚栄心の強い者たちが、両者の異なるイメージを一
つの捏造された礼拝様式に融合させたのだ。私は彼らの秘密をこの目で見てきた。か
つての社会的地位、身分、特権によって、私は彼らの中でも最も邪悪で策略に長けた者
たちと肩を並べてきた。私が教会に惜しみなく継続的に寄付をしてきたおかげで、これら
の尊大で偽善的で寄生的な者たちを遠ざけることができ、特に私の疑わしい錬金術の研
究からは遠ざけることができた。私は聖書を読んだことはないかもしれないが、愛するソフ
ィアと共に教会の説教に熱心に耳を傾け、聖書の教えを記憶にとどめている。そし
て、私の記憶に鮮明に残っているのは、この戒めです。「主なるあなたの神の名をみだり
に唱えてはならない。」さて、ラザロよ、あなたに尋ねます。もし人がうぬぼれて、自分が聖な
る者と呼ばれることを主張し、

彼はキリストの最高の代理人であり、他の人々が適切な悔い改め、赦し、主との再会を見出すことができる
のは、彼の教会を通してのみである。彼は間違っているのではないか？

メディチはラザロに近づき、別の言い方で尋ねた。「もし虚栄心と信心深い人々が主の
名において語ることを自らに課すならば、そのような虚栄心によって、彼らは
同様に、主なるあなたの神の名をみだりに唱えるのか？十分に明白ではないのか？」

ラザロは首を振り、顔を背けながら答えた。「あなたは本来の意味を歪めているのかもしれないね。」

船体の中では、さらに多くの板がきしむ音がした。

メディチはさらにこう訴えた。「ラザロよ、主は私の心をご存知だ。だからこそ私は天国に召されたのだ。そして主は、神と人との間に介入を企て、自らを天国への唯一の道だと主張する悪人の心も同様にご存知だ。天国への道は、十分の一献金、血、汗、そして苦しみを通してのみ正しく得られるものだというのに。これらの者は怪物であり、飽くなき権力と支配への渴望を満たすため、あなたの子供たちの流された血を喜んで、そして間違いなく飲み干すだろう。それは、悪が自らを悪と称しながらも、常にそうであり、これからもそうあり続けるだろう。それが悪の本質なのだ。」

「良い」。まさに、悪こそが救済への唯一の道であると最も激しく主張するのと同じように。

メディチはラザルスの目に募る苛立ちに気づき、彼の多彩な意見を急遽抑え、講義をさらに洗練させ、科学的観察と調査方法論を宗教的信念と過去の慣習と融合させて、自身の考えを明確にした。

論理的推論。「私の鋭い記憶によれば、それは私が自らの肩に課した重荷でもなく、邪悪な真実を全く見失うことなく、自分の意志で簡単に捨て去ることができるものでもなかった。そして実際、教会が聖書で厳しく禁じられている通りの振る舞いをするのは、全くもって恐ろしいことだと感じた。教会はその二枚舌の取引において、天国での地位を得る機会を除いて、地上のいかなるものも相続したり、欲しがったり、大切にしたりしてはならないと常に命じていたが、教会自身は集めた十分の一税という形で、あらゆる種類の地上の富を欲しがり、相続していた。

教会はそれを、膨大な数の教皇代理聖職者に惜しみなく分配した。規律正しく厳格な研究を行う学識者として、私は自分の義務と綿密な観察方法に容易に背くことはできず、同時に、実践的な教会の悪影響を無視することもできなかった。また、恐怖、貧困、

その冷酷な支配下では、苦しみと死が数多く発生した。私はできなかった 私はそうは思わないだろう。そして、あなたが私のことを正しく見抜いたように、恨みは私が常に背負うべき十字架なのだ。」

船は突然傾き、さらに急な角度で沈み、船体の板は海岸の石と船体の重力によって砕け散り、パチパチと音を立てた。ラザルスは身構え、スペクターに眉を上げて視線を向けた。船は安定し、静寂が訪れた。メディチは腕を胸の前で組み、まるで船が揺れなかったかのように話を続けた。「教会が貧しい人々から金品を奪い、自らの利益を得るという、教皇の慣習のもう一つの好例として、かつて町の広場で、金メッキの聖職者用馬車を見たことがある。

6頭の馬と太りすぎの御者を乗せた馬車は、靴屋の店内には、精巧に作られた靴が所狭しと並んでいた。最初は特に気に留めることもなく、そのまま歩き続けていたかもしれないが、馬の模様の一つが私の目を引いた。好奇心に負けて、私はその馬をよく観察するために小道を渡った。そして、まだその馬の正体がわからなかったので、声をかけてみた。

その馬は耳を立てて私を見つけた。立派で穏やかな馬だった。名前はバーロウ マグダレーナが子馬の頃に名付けたのだ。バーロウはステファンの両親の土地に住む農民一家のために、定期的に庭の手入れをしていた。しかし、バーロウが拘束具に激しく抵抗し、他の馬たちを驚かせ、御者を激怒させるとは予想していなかった。御者は私に向かって鞭を振り上げ、ローマの教皇にさえ聞こえるほどの大声で叫んだ。そして、馬の口から泡が出るまで鞭を叩いたのだ。」メディチはため息をついた。「あの朝以来、バーロウに呼びかけたことをずっと後悔している。確かに、私は馬を、おそらくは過ぎ去った、もっと楽しく若かった頃の断片的な記憶と混同していたのだろう。」幽霊はうなずいた。「確かに、あの厳しい時代には多くの善が失われてしまった。荷役動物でさえ、かつての面影を失い、哀れな姿になっていたように思えた。」

「しかし、世界にはまだ多くの善意が存在し、暗い日々は決して終わらない。」ラザロは言った。「これは聖書にはっきりと書かれている。あなたはそのような聖句を読んだことがないのですか？」

メディチは力なく肩をすくめ、口元にかすかな笑みを浮かべた。「時間があればそうするつもりだった。残念ながら、時間がなくなってしまった。死んでしまったからだ。」彼は眉を上げ、「当時、私の書斎には聖書の写本がありました。メディチ家から譲り受けたものです。かなり大きく、古く、重く、装丁には精巧な糸としっかりとした縫い目が施されていました。ページには色鮮やかな絵や碑文がびっしりと描かれていました。イタリアのウンブリア地方でノルウェーのベネディクト会修道士によって作られたわずか3冊のうちの1冊だと聞きました。」

それは、当時かなり大規模だった我が家の蔵書の中で、最も古い書物だったはずだ。

ラザルスは不安げな視線を床板に落とし、メディチに問いかけた。「こんなに美しい本なのに、一節も覚えていないのか？」

「暇な時間なんて全くなかったよ。」彼はニヤリと笑って態度を急変させた。「でも、たとえ一度も開けられなくても、棚に置いてあるだけで、それなりの役目を果たしていたんだ。」

「その場所は？」

「確かに。それは棚の一番左端に置かれていて、入り口近くの小柄で短気で熱心なイタリア人女性の視線とちょうど同じ高さにあった。」

私の研究室です。」

「ソフィア？」

「いいえ。彼女の養母、つまり血縁上の叔母です。そして、その古びた家系の書物は、彼女が最初に熱心に目を留め、通り過ぎるたびに必ず感想を述べるものだったのです。」

丁寧に置かれた、未開封のその書物は、彼女の目からその炎を吸い取っていった。

私の書齋に足を踏み入れる前に、彼女はいつも威厳に満ちていました。近づいてくる時は正義のライオンのようでしたが、去っていく時は寛容な子羊のようでした。」メディチはくすくす笑った。「時が経つにつれ、聖書は義母の激しい狂信から私を守ってくれました。」

「彼女はその本をととても気に入っていたようだ。」

「まさにその通りです。彼女の家系の聖典よりもずっと古いものでした。」

「しかし、彼女はあなたに中身を見るように、つまりその言葉や絵、ページを見るようにとは一度も頼まなかったのですか？」

“いいえ。”

「彼女はあなたがその本を読んでいるかどうか尋ねたことはありますか？」

「決して通りすがりに話すことはない。」

「彼女は、あなたがそこにあったから読んでいたのだと単純に推測しただけなの？」

「ええ」メディチはくすくす笑いながらそう答えた。

ラザルスは困惑しながら考え込み、こう言った。「どうやら彼女は、あなたが聖書を動かして使うことよりも、聖書を閉じたまま置いておくことを必要としていたようですね。」

二人は大声で笑い出した。

「もちろん、母はそう簡単には納得しませんでした」とスペクターは強調した。「二人はまるで正反対でした。客が書齋を通り過ぎて古い

その本について尋ねると、彼らは必ずこう答えた。「あの装丁の本は、疑い深いトマスご自身のものなのです。」

「使徒トマスからですか？」

「全く同じだ。そして、私に腹を立てた時、彼女はいつも私をその名前で呼んだ。特に、若くて頑固な少年だった頃はそうだった。彼女は私をあまりにも頻繁にそう呼んだので、客人は私をグレゴリ一様ではなく、トマス様と間違えて呼ぶことさえあった。それは時として、実に不安なことだった。そして、実際そうだったのだ。」幽霊はため息をつき、遠くを見つめながら、何世紀も前の親密な思い出に浸っていた。

彼は少し歩き回り、もう少し考え込み、そしてついこう続けた。「かつて修道院の従者として、修道院の写字室全体にアクセスできた者として、あなたが私よりも聖書の教えに精通していることは認めざるを得ません。しかし、私は教会の歴史上の出来事に合致する形でしか教会について語っていません。その点に関して、私はあなたに嘘をついていません。また、教会の多くの公言された教えや歴史の様々な記録も、それ自体に偽りの証言をすることはありません。すべての記述と記録は同じ真実を共有しています。したがって、

あなたは聖書に精通しておられますが、私も歴史、特に戦争術、そして教会を形作った数々の出来事について、同様に博識です。」

「メディチ家よ、君の『栄光に満ちた蛆虫の山』という紛れもない歴史的記述も、君の博識な教会史の一部だったのか？」

幽霊は、ますますこわばる笑いの表情と格闘しながら、なんとか平静を取り戻した。「まあ、正確にはそうではない。しかし、教会という、そうでなければどうしようもなく味気ない話題に、魅力的な議論を添えるためには、こうした表現は彩りを添えるだろう？」

ラザルスは目を丸くした。「君は黒さしか表現していない。黒は色相なのか？」

メディチはくすくす笑い、無制限の表現の自由をいくらか手放した。「よろしい、もしかしたら私は少し口が軽すぎたかもしれません。どうかお許してください。私は聖書の内容を伝えることはこれ以上しません。なぜなら、私はあなたほど聖書に精通していないからです。しかし、たとえあなたが当初は私の見解の一部に反対するとしても、純粋に歴史的な観点から教会についての私の考えを述べることを許されるべきです。

ラザルスは肩をすくめて条件付きで同意した。「教会に対する君の軽蔑の色が、あまりにも眩しいほど明るくなければね。」

「ええ、本当にそうでしたよ、あらゆる意味で」

ラザロは目を細めて彼の言葉を遮った。

スペクターは指を空中に突き出し、ニヤリと笑って、丁寧に本来の宣言を締めくくった。「しかし、あなたのために、私の通信文から虫けらや略奪的な敬虔さへの徹底的な嫌悪に関する記述をすべて削除し、私がはっきりと覚えている限りでは、おそらくもっと受け入れやすい教会史をあなたに穏やかに伝えましょう。」

「もしかしたら、もっと受け入れやすい形で…何か別のことを？」ラザルスは話題を変えようとした。「もしかしたら、あなたの愛するソフィアについてもっと話してくれるとか？」

「では、ソフィアの養父母に初めて結婚の許しを求めた時のことをお話ししましょうか？あの恐ろしい出来事、そしてそれに関する独自の『ドン』の書』をお話ししましょうか？」

ラザロは耳をぴくりと立て、好奇心旺盛な犬のように首を傾げた。「『ダニエル書』のことですか？」

メディチは笑った。「ええ、まさにその通りです。ソフィアの叔母も全く同じことを言いました。私にとっては実にみっともない瞬間でしたが、同時にとても面白く、波乱万丈な出来事でもありました。」

「ぜひ聞かせてください」とラザルスは再び笑顔を取り戻し、落ち着きを取り戻して認めた。

「では、お話ししましょう。おそらくイタリアへ向かう途中で。きっとあなたもその話を楽しんでいただけたと思います。」

「間違いない」とラザロは答えた。

木製の船体にまたもや轟音が響き、続いて甲板の下で突然水が流れ込む音がした。岩にしっかりと固定されていた船は、ついに海に屈したのだ。木は軋み、ひび割れ、甲板はわずかに傾いた。二人は果てしない南の海と星々を見渡した。潮の香りを運んで、一定の風が吹いていた。途切れることのない波の音が彼らの下で打ちつけ、泡を船体に叩きつけていた。ラザルスが二人の間の沈黙を破った。「海は雲よりも深く、高いかもしれないと言ったね」とラザルスは言った。「星よりも深く、高いのだろうか？」

「天空そのもの？ それは違うと思う」とメディチは答えた。

「あなたはこれまで星空を飛んだことがありますか？」

幽霊はくすくす笑った。「もちろんそんなことはない。存在するすべての天使に見つかるのが怖くて、そんな危険を冒す勇気もない。あそこには隠れる場所なんてないんだ」とメディチは上を向いて頷きながら言った。「私の居場所はここ、地獄と私のソフィアを探し求める場所だ。」

「山頂から海底まで、隅から隅まで探し回った。」幽霊はラザルスをじっと見つめ、微笑んだ。「しかし、君を案内役として、私の探求はこれで終わったと信じている。」それから彼は海に目をやり、顔をしかめた。「そして、海底を探するのは本当に嫌だった。恐ろしく底知れぬ海の怪物が、永遠の闇の深い谷を泳いでいるのだ。」

「海の怪物まで？」ラザロは尋ねた。

「特にそうだ」とメディチは断言した。「私は最も深い窪みに潜む巨大な怪物たちを目撃した。巨大な頭を持ち、胴体のない白い巨人。そこから無数の長く緩んだ脚が生えていた。その脚は途方もなく長く、最大の外洋貿易船の全長に匹敵するほどだった。また、頭のない巨大な幽霊のような体も見た。それはまるで、長い流れるような髪を詰め込んだ巨大な水泳帽のようだった。その光る髪は獲物を殺した。さらに、口を大きく開け、長い尾を持つ、歯のない巨大な海コウモリも見た。そして一度、巨大な二枚貝が広がる海底に出くわした。その中でも最大のものは、突然閉じた殻の中に二人の人間を丸ごと飲み込むことができた。」メディチは鼻を鳴らし、顔をしかめながら付け加えた。「それから、あの青白く醜い頭のようなものもいた。彼は嫌悪感を露わにして身震いした。」

続けて、「それらはまるで浮かぶ頭部のようで、不規則な歯が並んでいた。そして、その巨大な目と大きく開いた口は、彼らの存在のほとんどすべてを覆い尽くしていた。大きな目とたくさんの歯を持つ頭部だった。もし想像できるなら、漆黒の海底世界を思い描いてほしい。そこには、獐猛で貪欲な、光り輝く浮かぶ頭部が満ち溢れていた。」

「海には怪物の頭があるのですか？」ラザルスは尋ねた。メディチが語る、外見上はグロテスクで巨大な、海の奇妙な生き物たちの幻想的な描写に、すっかり魅了されていたのだ。

「まあ、他の海の怪物ほど恐ろしいものではなかったけどね。」

ラザルスは船のぼろぼろになった甲板の奥深くを見渡した。「それらはエデンの宝石よりもさらに大きかったのだろうか？」

メディチは恥ずかしさで顔色を青ざめさせ、指の間に約3インチの隙間を作りながら、「ええ、これくらいの大きさです。しかし、見た目は本当に恐ろしいもので、不完全なようで、非常に不均衡で、あらゆる面で幽霊のようで、まるで私自身のようです。想像できますか？恐ろしいものでした。初めてそれらを見つけたとき、私は地獄の門に近づいたと思っただけです。なぜなら、それらは確かに地獄の門ではなかったからです」と認めたかもしれません。

主の驚くべき計画のように見える。しかし、私は間違っ理解していた。それらは地獄から来たわけではない。とはいえ、蜘蛛でさえ、彼らと一緒にいるとよりハンサムに見えるかもしれない。

「蜘蛛にははっきりとした胴体としっかりした脚がある。なのに、胴体も脚もない、宙に浮く頭だと？」メディチは不満そうに首を振り、海岸の方に視線を向けた。

「まるで洞窟に棲むコオロギのようだ。普通のコオロギにしては、大きすぎる胴体を支えているように見える、長くて太い脚をしている。体の各部分のバランスが全く取れていない。」彼は再び身震いした。「何とも奇妙な、いらだたしい生き物だ。」

エルジョは、かつて人相学に精通していた幽霊が、身体の不均衡や解剖学的奇形を観察することに恐怖症を患っているという、一見奇妙な考えについて考えを巡らせた。彼は内側から湧き上がってくる笑いを抑えようと唇をすぼめた。それから彼は背を向け、唇を噛みしめ、真剣で困惑した様子でメディチに向き合った。「しかし、もしあの小さな頭のようなものがあなたに投げつけられたらどうするんだ、メディチ？」

スペクターは振り返ってうなずき、冷たく言った。「ならば、彼らは死ぬしかないだろう。」

「頭のやつら？」

「いやだ」と幽霊は吠えた。「誰が私にそれを投げつけたんだ！」

ラザルスはむせび、完全に笑い転げ、体を折り曲げ、バランスを崩した。パキッ！ザブン！手すりの一部が海に崩れ落ち、メディチが後をついてきたエルヨを掴まなければ、ラザルスは海に真っ逆さまに落ちていたかもしれない。ゴースト号は、みじめなラザルスを船上に引き上げた。

船の甲板。

ラザロは立ち上がった。「しかし、あなたは霊です。その霊はあなたを通り抜けてしまうでしょう。」

メディチは彼を解放した。「とはいえ、それは一度きりのことだ。そして、君の提案には何ら滑稽なところはない。」

ラザロは気を取り直した。「メディチさん、お許してください。私はただ」

「ええ、分かっています。それに、それを面白がったのはあなたが初めてではありません。しかし、私に洞窟コオロギを投げつけた最後の生き残りが、その短いシーズン中、私の最長患者になったことを覚えておいてください。」

ラザルスはぎこちない、どこか逃げ出したような笑みを浮かべながら彼を安心させようと、「そんなことはしませんよ、メディチ。それに、私を捕まえてくれてありがとう」と言った。

メディチはウィンクして肩をすくめた。「本当は、お前には海水で口を洗ってもらわなければならないと思っていたが、お前が倒れた時にたまたまソフィアを支えただけだ。今、お前は私と彼女の間に立っている。」

ラザロは微笑んでうなずいた。「それでも、あなたには恩義を感じています。」

「それで十分だ」とメディチは答え、祭服に両手を当てて踵をついて後ろに体を揺らした。

ラザルスは、失われた手すりの部分と、その下の荒れ狂う海を見渡ししながら、昔の、もっと単純な日々を思いを馳せた。彼は、自分とミゲルとタテウスが井戸の穴で、使い終わった修道院のワイン樽をすすいでいた、ちょっと滑稽な出来事を特に思い出していた。ミゲルが水に飛び込み、海の怪物が彼を捕らえた。ミゲルが演技をしていることは分かっていたが、小さな井戸の洞窟の隅々まで知り尽くしていたタテウスは、海の怪物と思われるものからミゲルを救おうと必死になり、ミゲルを確実な死から救うために何もしなかったラザルスを叱責した。ラザルスはくすくす笑い、彼は、騙されやすいくたずら好きな地下墓地の仲間たちのことをいつまでも恥ずかしく思っていた。彼は星空を見上げた。

「それは一体何だ？」メディチは疑いの眼差しで目を細めて尋ねた。

「あなたのせいではありませんよ」とラザロは手を振って軽く受け流した。「ただ、ずっと昔のことを思い出しただけです」彼は頷きながら、さらに詳しく説明した。「かつて私は、世界を実際よりもずっと小さく捉えていました。小さく感じていた頃の方が、ずっと心地よかったです。」

「どうして実際よりも少ない数値だと判断したのですか？」

「まあ、かつては鳥は天国に届くほど高く飛べると信じていたんだ。」彼は肩をすくめ、「実際は無理だと分かっているけれど、そう信じたかったんだ。」と認めた。

メディチはニヤリと笑った。「ラザロよ、鳥が天国へ飛べないとどうして断言できるのだ？」彼は両腕を広げ、一瞬空を見上げた。「君は空の隅々まで見渡せるほど高く遠くまで飛んだことがあるのか？」

ラザルスはメディチの目を見つめてから答えた。「メディチ、私もあなたと同じように、怪物が地獄から来たのではないと確信しています。」

海のあらゆる場所を調査するほど深く遠くまで搜索したのか？

「彼らは私の怪物ではない」とメディチはにやりと笑って言い返した。「しかし、私たちは、

「どちらの考えにもほぼ確信を持っています。』彼はうなずき、ラザルスを称賛した。「君の中には、真に洞察力に富み、思慮深い錬金術師が潜んでいる。」

「そして、あなたの信仰と疑念のバランスを見れば、あなたも立派な修道士になれると私は信じています」と、ラザルスは船の甲板の中央に向かって歩きながら、何気なく言った。メディチはそれに続いた。

彼らは散乱した瓦礫をまたぎ、船倉の入り口近くの比較的開けた場所へと進んだ。ラザルスは立ち止まり、目を閉じた。メディチはラザルスの周りを回り込んだ。彼はラザルスが深く息を吸い込み、優雅に頭を上下左右に傾けるのを見守った。

そしてラザルスは、外からも内からも、エルジヨの鋭い方向感覚から明確さと方向性を引き出し、同時に修道院の地図の汚れのない記憶を重ね合わせた。彼は振り返り、目を開けて

南東の海原の水平線。メディチはラザルスの瞳孔が大きく開いているのに気づいた。その瞳孔は真っ黒で、ラザルスの目から青い色がほとんど消え失せていた。「我々はこの方向へ新たな航路を見出すだろう」とラザルスは言い、海原の水平線を指さした。

「そろそろ出発しましょうか？」

メディチは彼を確かめた。彼は空を見上げ、北極星を見つけ、星座の並びを辿ってさらに下へと視線を落とし、ついにラザルスの指し示す方向と視線が平行になり、遠くコルシカ島へと続く彼の計算通りの方向を捉えた。彼は唇をすぼめて首を横に振った。「私がただウサギを捕まえただけなのに、よくも私を魔術師呼ばわりできるな？目を閉じてどうやってそんなに完璧に航海できるんだ？」

ラザルスは微笑んで翼を広げた。「君だけが、魔術ではない能力を持っているわけではない。」

幽霊はため息をついた。「曖昧すぎるな。いい切り返しだ。」

ラザロは尋ねた。「コルシカ島へ向かうべきだろうか？」

メディチは天に向かって手を差し伸べた。「神の恵みによって、上へ、そして前へ。ラザロ修道士よ、どうか道を照らしてください。」

ラザロは満面の笑みを浮かべ、振り返り、翼を広げた。

彼らは一体となって残骸を放棄し、夜空へと飛び立った。一度だけ旋回した後、意図的に海へと進路を取った。エデンの宝石は遠ざかり、フランスの地は消え去り、新月の輝きの下、荒れた海面はやがて煙を帯びたガラスのきらめく膜へと滑らかになった。彼らはさらに高く上昇し、レオン湾の広大な海が再び全世界を飲み込むかのように見えた。まるでノアだけが知っていたかのようなようだった。しかし、特徴のない海の景色と無限の水平線にもかかわらず、渡り鳥のようなエルジヨと冷徹に計算高いスペクターは、地上と天空の間の空中コースから決して揺らぐことはなかった。彼らは共に、

船長にとって最も重要な航海計器。それらはまるで、汽水域の深淵をまっすぐに航行する、空高く舞い上がる羅針盤と六分儀のようだった。

たとえどれほど不自然で、才能に恵まれた、互いに補完し合う二人の仲間に見えたとしても、ラザロとメディチは、運命が間もなく彼らに、世界にもたらされた事態を覆すために、計り知れない努力と予測不可能なタイミングを要求することになるとは、まだ知る由もなかった。しかし、歴史におけるその決定的な転換点は、彼らにも、そして人類にも、まだ訪れていなかったのだ。

【第1巻 :復活の終わり】



この文学作品は、

エドガー・アラン・ポー（1809年 - 1849年）

—彼の遺志が私たち一人ひとりの心の中で生き続けることを願います—



~[GothicNovel.Org](https://www.gothicnovel.org)~